昭和基地の夕焼け

福島　勲

1969年（昭和44年）11月25日の東京晴海埠頭。第11次南極観測隊を乗せた砕氷艦「ふじ」のまわりは見送りの人で一杯であった。

その中に北海道から駆けつけてくれた父、母、兄弟たちがいる。また学生時代の友人たち、NTTの職場の同僚たち、カナダ人宣教師Don Phibbsさんと教会の方々もいる。

一人一人を見ながら、生まれ故郷・苫前町（とまえちょう）での思い出が走馬燈（そうまとう）のように私の脳裏（のうり）に流れていた。

小学5年の時から新聞配達をしていたが、ある冬、猛吹雪の中で新聞が飛び散ってバラバラになった。何とか拾い集めて配達したが、その汚れた新聞を見ても苫前の町の人は誰一人文句を言わず「ご苦労さん」と受け取ってくれた。

また、上京前にラジオ修理のバイトをした。染泊（そめどまり）地区の竹内さん宅のラジオだったと思うが、かえって前より聞こえが悪くなってしまった。それでも竹内さんは「もう古いラジオだから、いいのよ」と言ってくれた。

中央左手に家族が、右下方にはダン・フィブスさんと教会の方々。中央手前には学生時代の友人やNTTの職場の同僚たちが見える。

７人兄弟の中で、私は一番出来が悪く、体力も弱く、人前では何もしゃべれない小心者であった。そんな私を、両親はじめ兄弟たち、叔父、恩師など、苫前町のたくさんの方々は、優しく時には厳しく育ててくれた。

また上京してからは特に宣教師や多くの友人たちに励まされ助けられてきた。

「その方々のお陰で、自分は今ここにいるのだ」

そう思うと、内側に、熱く込み上げて来るものがあった。

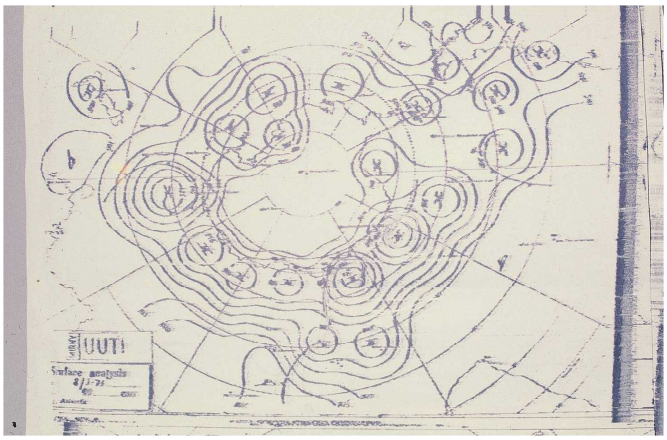
「みんな、みんな。ありがとう。
みんなのお陰で、いま南極に向かうよ。
期待に応えられるように頑張ってくるからね～」

そうつぶやいているうちに、「ふじ」は岸壁を離れた。

晴海埠頭を離れる、いざ出発。

2週間後には、オーストラリアの寄港地フリマントルに入港。1週間の停泊。新鮮な野菜や肉等を調達して、再び南極に向けて出発。

フリマントル港に停泊中のふじ

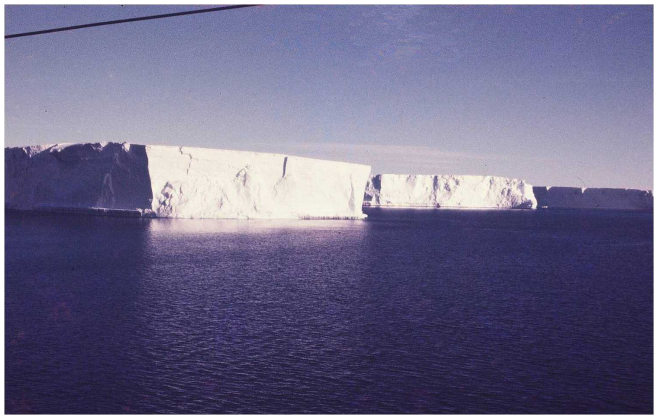


南極大陸のまわりを渦巻いている暴風圏（天気図）

そして間もなく、年中台風のような暴風圏に入る。揺れに揺れ、余りの船酔いに「ああ、来るんではなかった」と思うほどであった。しかし、3日後には波も穏やかとなり、夏の南極海へと移って行った。

広大な氷海の中を砕氷艦「ふじ」は、そのオレンジイエローの船体を揺り動かしながらゆっくり進んでいる。

「ペンギンだぞー！」



美しい南極海

誰かが叫ぶ。氷の割れる音にびっくりしてか、近くにいたアデリーペンギンがあわてて逃げる。巨大な氷山が次々と目前を過ぎていった。昭和基地に着くまでの南極海風景も、また言語に絶する美しさがある。

お出迎えのペンギンたち

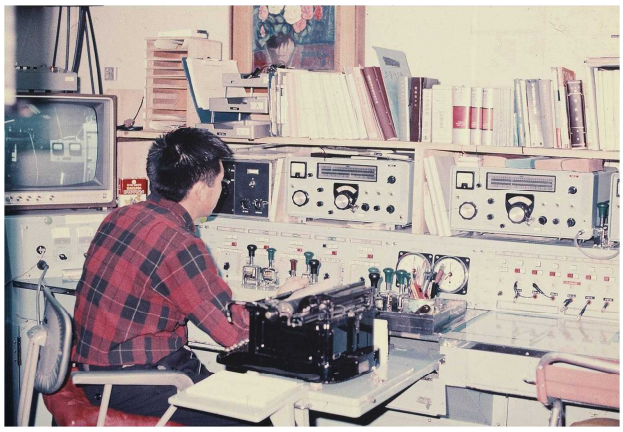
私が参加した第11次南極観測隊（1969-1971年）では２つの大きな任務があった。

１つは昭和基地で初めてオーロラ観測用ロケットの打ち上げを成功させること。

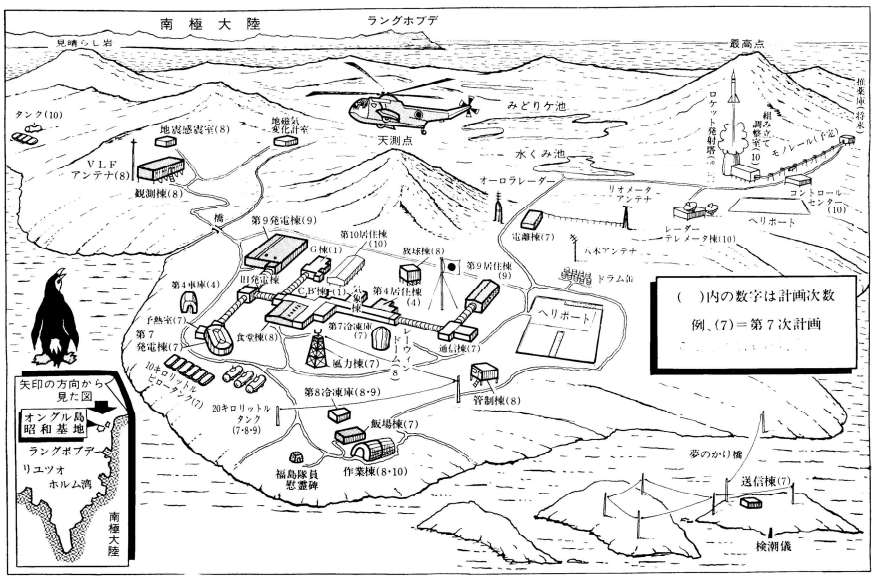
もう１つは南極大陸上に将来の雪氷学的調査のため、みずほ基地（昭和基地から南に約300km地点）を建設することである。

私は昭和基地の通信棟で生物学者の松田達郎隊長と二人で生活することになった。

ペンギンと握手、仲良くしようね。



昭和基地の通信室（南極の外国基地や日本との交信）



昭和基地全景（1970年当時）

昭和基地の通信時間表
（1970年2月現在）

03:15	モーソン基地（気象観測データ交換）
04:45	モーソン基地（気象観測データ交換）
05:00	砕氷艦ふじ（観測資料･情報交換）
09:15	モーソン基地（気象観測データ交換）
11:00	臼井送信所（共同ニュース受画）
11:00	砕氷艦ふじ（状況連絡）
12:30	KDD国際電電（電話連絡･写真電送）
13:00	NTT銚子無線局（公衆電報送受信）
14:00	臼井送信所（共同ニュース受画）
15:05	ミールヌイ基地（地上･高層天気図受画）
15:10	モーソン基地（気象観測データ交換）
15:20	砕氷艦ふじ（状況連絡）
16:00	臼井送信所（共同ニュースタ刊受画）
16:30	旅行隊（観測資料･状況連絡）
16:45	モーソン基地（気象観測データ交換）
17:10	マラジョージナヤ基地（観測データ交換）
17:20	旅行隊（観測資料･状況連絡）
17:30	臼井送信所（共同ニュース朝刊受画）
17:30	ラジオジャパン（短波放送受信）
18:20	砕氷艦ふじ（状況連絡）
21:10	モーソン基地（気象観測データ交換）

昭和基地のあるオングル島から見たふじ。向こう（約４㎞先）に南極大陸が見える

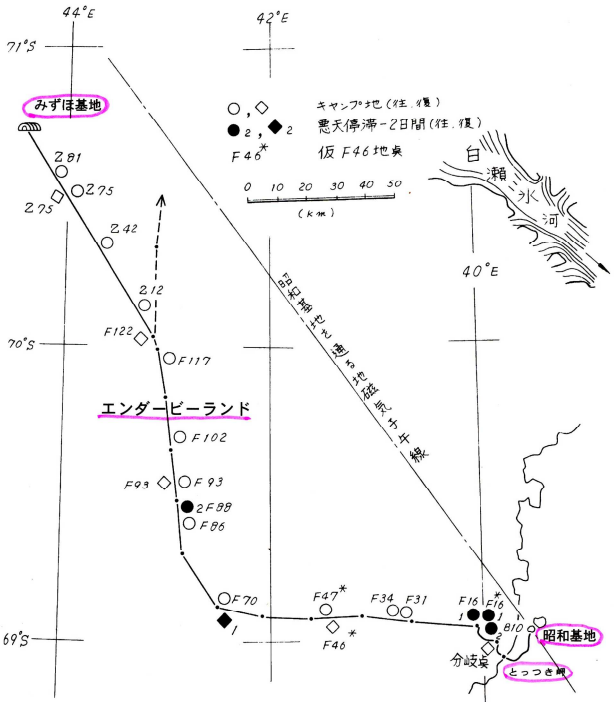
昭和基地へと案内してくれるペンギンたち先住民

大陸旅行へ出発

夏の期間にオーロラ観測用ロケットの打ち上げも終え、越冬生活にも慣れた頃、秋の大陸旅行に出かけることとなった。

この旅行は前進基地建設のために予め燃料や建設資材等を途中まで運んでおくためである。

また通信を担当する者として厳寒の冬期の大陸上で、昭和基地や他の外国基地との交信を確保できるかどうか確認しておく必要があった。



昭和基地からみずほ基地へのルート

オングル島にある昭和基地を出たのは５月初旬のこと。朝９時といってもまだ薄暗い。だんだん日が短くなっている（昭和基地では５月末から43日間太陽が出なくなる）。

海氷上を15キロほど走って、大陸に登りやすいトッツキ岬に着いた。クラックの多い所であるが表面は雪が被さっていて分かりづらい。前を走っていた大型雪上車が急に傾いた。「クレバスだ！」

あったいう間に左キャタピラがクレバスに落ち込んでしまった。

クレバスに落ち込んだ雪上車

幸い車体が大きかったため落下することはなかったが、他の車で引き上げられるのに一時間ほどかかった。このクラック地帯を走る時は盲人が歩くがごとくである。時速数キロほどの超低速でなんとか大陸の傾斜面を上りきった。

トッツキ岬から凍った氷海・昭和基地方向を見る

ブリザードの中でも観測を続ける

２日目、朝８時起床。歯を磨くことも顔を洗うことも省いて、まだ薄暗い外に懐中電灯をつけて雪上車のエンジンを熱風機で暖める。30分ほどしてようやくエンジン始動。４台の雪上車のエンジンがすべて始動したころ、少し薄明るくなり、スピードを上げて進む。朝食はパンにジャム、缶詰類が主になる。

この頃から大陸上はどちらを見ても雪の大平原。雪と言っても気温が低くマイナス40度以下であるから引き締まっていて８トン車でもぬかることもない。スピードは上がる。雪氷、気象、地磁気等の観測を続けながらも一路みずほ基地建設予定地へと向かう。

広大な南極大陸上を走る雪上車の軌跡

夕食は少し豪華にとカツ丼としたが、アルファ米と充分に煮きれなかったカツでは「生米（なまごめ）に生肉（なまにく）」をのっけて食べている感じであった。

良い材料があっても限られた燃料のもとでは、それを充分に生かすことができない。結局、夕食はカレーライスが多くなった。

昭和基地と連絡をとる。５日目の朝、いつものように送信機の電源を入れたが電波は発射されない。アンテナに電流が流れない。

「パワートランジスタがやられたな！」と思った。狭い車内での修理は大変である。しかし直さなければならない。ところが、修理の準備をして再び試しに電鍵（でんけん）を押すや、電流が流れるではないか。

ハレルヤ！　「しかし、なぜ！」

狭い雪上車内で昭和基地と交信する

マイナス40度にもなると当時のトランジスタの中で電子の動きが鈍くなっていたのだ。車内の暖房で気温が上がり、電流が流れ始めたのである。

その後も気温は下がり、マイナス57度を記録した。車外での作業が厳しい。アンテナの同軸ケーブルを引き延ばそうとするとカリン糖のように折れてしまう。

マイナス57度の車外でのアンテナ展張作業

気温がマイナス50度以下に下がると、大陸氷の表面が急激に収縮して割れ目の入るすさまじい音響がガンガンと夜通し続いたこともあった。その音を凍った寝袋に氷のような足をこすりながら聞いた。

数週間が数ヶ月にも思えた大陸旅行の帰路、昭和基地をのぞむトッツキ岬近くに戻ってきた。眼下(がんか)には氷山が点在。その先に懐かしい昭和基地のあるオングル島が見えたが、いまだ海氷に閉じ込められている。墓原(はかわら)のように蒼(あお)ざめた海氷、氷山群、そこも寒々と見えた。

ところが間もなく、その光景が一変した。真っ赤な夕焼けが広がってきた。見る間に氷山群は赤く染まり、まるで暖められている感覚である。40年経った今も、私はその光景を忘れることができない。

三浦綾子さんの小説「続氷点」の最後の部分で、主人公の陽子は網走に来る。人を許せない。心の内の原罪に苦しんでいる。その部分を以下に引用させていただく。

この灰色一色の氷原(ひようげん)が、人生の真の姿かもしれない。そう思って、陽子は椅子から立ち上がろうとした。すると再び、すうっとサーモンピンクの光が、流氷の原を一筋淡(あわ)く染めた。

次の瞬間だった。突如、ぽとりと血を滴(したた)らせたような真紅に流氷の一点が滲(にじ)んだ。あるいは、氷原(ひようげん)のそこから、真紅の血が滲(にじ)み出(で)たといってよかった。それは、あまりにも思いがけない情景だった。

誰が、流氷が真紅に染まると想像し得たであろう。陽子は息をつめて、この不思議な事実を凝視(ぎようし)した。

やがて、その紅の色は、ぽとり、ぽとりと、サモンピンクに染められた氷原(ひようげん)の上に、右から左へと同じ間隔を置いてふえて行く。と、その血にも似た紅が、火焔(かえん)のようにめらめらと燃えはじめた。

（流氷が！　流氷が燃える！）

夕日

人間の意表(いひよう)をつく自然の姿に、陽子は目を見はらずにはいられなかった。墓原(はかわら)のように蒼(あお)ざめた氷原(ひようげん)が、野火(のび)のように燃え立とうとは。陽子はいまの今まで、夢想(むそう)だにできなかった。いかなるプリズムのいたずらか。とにかく、いま、確かに現実に陽子の目の前に、流氷はめらめらと焔(ほのお)を上げて燃えているのだ。

じっと、そのゆらぐ焔を見つめる自分の心に、ふしぎな光が一筋、さしこむのを陽子は感じた。

またしても、ぽとり、血の滴るように流氷が滲んで行く。

（天からの血！）

そう思った瞬間、陽子は、キリストが十字架に流されたという血潮を、今目の前に見せられているような、深い感動を覚えた。それは、説明しがたいふしぎな感動だった。

その血から、火がふき出るように燃える。ややピンクを帯びた炎となって、ゆらめき燃える。陽子はいつのまにか、手を固く握りしめながら、見つめていた。

右手の焔が次第にうすらいで行く。が、左手の火焔は灰色の氷原の中に、なお燃えつづけている。

先程まで容易に信じ得なかった神の実在が、突如として、何の抵抗もなく信じられた。このされざれとした流氷の原が、血の滴りのように染まり、野火のように燃えるのを見た時、陽子の内部にも、突如、燃える流氷に呼応するような変化が起こったのだ。

この無限の天地の実在を、偶然に帰することは、陽子には到底できなかった。人間を超えた大いなる者の意志を感ぜずにはいられなかった。

（何と人間は小さな存在であろう）

あざやかな焔の色を見つめながら、陽子は、いまこそ人間の罪を真にゆるし得る神のあることを思った。神の子の聖なる生命でしか、罪はあがない得ないものであると、順子から聞いていたことが、いまは素直に信じられた。この非情な自分をゆるし、だまって受け入れてくれる方がいる。

なぜ、そのことがいままで信じられなかったのか、陽子はふしぎだった。焔の色が、次第にあせて行った。陽子は静かに頭を垂れた。どのように祈るべきか、言葉を知らなかった。陽子はただ、一切をゆるしてほしいと思いつづけていた。

再び視線を外に向けた時は、氷原は一面に鉄色となって暮色の中にあった。灯台の赤と青の灯が、またたきはじめている。

陽子は、北原に、徹に、啓造に、夏枝に、そして順子に、いま見た燃える流氷の、おどろくべき光景を告げたかった。自分の前に、思ってもみなかった、全く新しい世界が展かれたことを告げたかった。そして、自分がこの世で最も罪深いと心から感じた時、ふしぎな安らかさを与えられることの、ふしぎさも告げたかった。…（以下略）

（三浦光世氏に転載許可済）

それは私が初めてキリストの愛に感動した時の経験とも重なる。1959年（昭和34年）に上京した当時、私の心には毎月、定期便のように襲って来るものがあった。人間不信、人生に対する虚無感（きょむかん）、罪責感（ざいせきかん）、そして死に対する恐怖である。そのことを家族にも友人にも話せなかった。海氷に閉ざされた氷山群のように、私の心は冷たく凍りついていた。

その秋、私はある宣教師から頂いた新約聖書を読み始めた。そして不思議な方に出会った。

つばをかけられ、こぶしで殴られ、平手打ちにされ、むちで打たれ、イバラで編んだ冠をかぶせられ、葦（あし）の棒でたたかれても、されるままにしている。不思議な方だ。それまで私はこのような方に出会ったことはなかった。そんな仕打ちを受けたら、やり返す。私なら黙ってはいられない。しかし、この方は不思議だ。さらに、そのお方はゴルゴタと呼ばれる刑場で十字架に釘づけにされた。

「さて、十二時から、全地が暗くなって、三時まで続いた。
三時ごろ、イエスは大声で、『エリ、エリ、レマ、サバクタニ』と叫ばれた。
これは、『わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか』
という意味である。」

（新約聖書・マタイによる福音書27章45-46節）

この節を読んだ瞬間、その光景が私の心に鮮明に映し出された。
キリストはこんな私のために死んでくださったことを一瞬にして悟らされた。
それまでの罪過ち、自己中心の思い・行為のすべてが、これまた一瞬にして私の脳裏（のうり）を駆け巡った。
そして心から「イエス様。ごめんなさい」と叫ぶ祈りをしていた。

さらに、自分の罪過ちが赦されている確信で、心は平安と喜びで一杯に満たされた。神の愛は氷のような私の心を温め、生かし、新しいいのちに生きる者として下さった。それはよみがえられたイエス・キリストとの共なる歩みの始まりでもありました。

今思えば、その時から私の新しい人生が始まったのだった。